

〔翻 訳〕

『スペクテイター』（1）

門 田 俊 夫

『ジョンソン博士によるアディソン伝』

ジョーゼフ・アディソンは1672年5月1日、父ランスロット・アディソンが教区牧師をしていたウィルトシャー、アンブロスベリ近郊のミルストンで生まれた。ジョーゼフは虚弱で生きながらえそうに思われなかったために、誕生日当日に洗礼命名を受けた。父の性格から考えてジョーゼフは当然強い敬虔の念を与えられたと考えられるが、通例の家庭教育を受けたのち、アンブロスベリのネイス夫人、そしてその後ソールズベリのテイラー氏にその教育が委ねられた。1683年には、父がリッチフィールドの執事に任命され、家族もまたその地へ住居を移した。ジョーゼフはしばらくの間、当時リッチフィールドの校長であり、故ピーター・ショー博士の父であったショー氏のもとに預けられた。

ジョーゼフはチャルトルーの学校で、この学校へはソールズベリあるいはリッチフィールドの学校から転校して来たのだが、エリス博士のもとで勉強を続けた。そしてその頃、サー・リチャード・スティールと親交を結んだ。この親交によって、のちの彼らふたりの共同作業が実にうまく行くことになったわけである。

1687年、アディソンはオックスフォード大学クィーンズ・コレッジに入学した。ここで、1689年、偶発的なことだが、彼はラテン語の力によって、のちのクィーンズ・コレッジ学寮長ランカスター博士に目をかけられることになった。そして、ランカスター博士の推薦によって、彼はモードリン・コレッジの給費生に選出され、1693年2月14日修士号を取得した。引き続き彼は大学に残って詩歌と批評の研究に努めた。そしてラテン語作文の力が卓越したものとなり、実際、特別の称賛を受けた。また、彼の関心もこのラテン語に向いていたように思われる。

24歳のときにドライデンに宛て書いた英詩によって、彼は初めて英語の詩歌に対する力を示した。そしてそのすぐのち、ウェルギリウスのハチに関する『農耕歌第4巻』の翻訳を出版した。ドライデンはそれに因んで「昨今の群れどもはほとんど巣箱に住まわせる価値なし」と語る。ほぼこれと同時期に、アディソンはドライデンのウェルギリウスに関する数冊の書物の序文に付ける梗概を担当した。そして、『農耕歌に関する随筆』とイギリスの主要な詩人の特徴を盛り込んだ韻文に関する論文を発表した。

この頃、アディソンはCongreveから時の大蔵大臣モンタギューを紹介された。そして、廷

臣たちと知り合い、カウリー、ドライデンのほかにモンタギューを詩人の仲間に追加した。

生来の慎ましさとあいまって、またモンタギューの影響力により、アディソンは聖職者になるのだという彼の元々の筋書きからそれることになった。モンタギューは紳士としての適切な教育を受けなくて政治に関与している人たちの腐敗を強く説いた。また、モンタギューは教会に敵対する意図はなかったのだが、アディソンを留めておく以外にはなんら教会には危害は加えないと明言した。

アディソンは1695年にウィリアム王に捧げる詩を、そして1697年には、ライスウィクの和平の詩を書いた。

1699年、アディソンは公務には就けなかったのだが、年2百ポンドの年金を獲得し、旅が可能になった。おそらくフランス語を勉強するためだろう、プロアに1年滞在した。そしてその後、イタリアまで足を延ばし、詩人の眼でその地を見聞した。彼はのんびりと旅をしていたのだが、ただ怠惰に過ごしていたわけではなかった。何故なら、彼はその地の観察記録をつけていただけでなく、聖牌についての対話、4幕にわたるカトーものを書く時間を見い出していたからである。ここに、ティケルとの関係が生じる。おそらくアディソンは資料を収集し、計画を練っただけなのだろう。

イタリアでこのほかに何をしていたかは別にして、アディソンはその地でハリファックス卿宛に手紙をしたためた。その手紙は彼の詩作の最も荘厳なものではないにしろ、極めて優美なものと考えられている。しかし、彼はほぼ2年後には金銭に逼迫して急遽帰国の必要に迫られた。そしてある大地主の家の家庭教師にならざるを得なくなった。その直後に『旅行記』を出版した。

1702年、彼がいかに切り詰めた生活をしていたかが分かるのだが、いかにもお粗末な風采で帰国したとき、彼はかつての後援者たちが権力の座から離れているのが分かった。そのためしばらくの間は非常にゆったりと精神の修養に打ち込んだ。そのようにして修養を積んだ精神にとっては時間が浪費されているとは思えなかった。しかし、彼はそれほど長く無視されたり、また無用者扱いされることはなかった。1704年のプレニムでの勝利によって、彼は彼の詩的な才能を表明する機会が与えられた。この才能が認められて、彼はロックの跡を継いで訴願委員のポストが与えられた。

翌年、彼はハリファックス卿に伴ってハノーヴァーに滞在した。そして、1年後には最初はサー・チャールズ・ヘッジズ、そしてさらに2、3カ月後にはサンダーランド伯爵のもとで国務次官となった。

この時期に彼はロザモンドのオペラを創作した。このオペラは上演されたとき、さんざんの出来でやじが飛ぶか無視されるかのどちらかであった。しかし、アディソンは読者なら正当に評価してくれる信じて、モールバラ公爵夫人への献詞を添えてこれを出版した。

ウォートン侯爵がアイルランド総督に任命されると、アディソンは次官として彼に同行し、バーミンガム・タワーの記録官となり、3百ポンドの年俸を支給された。このポストは名目的なもの

にすぎなく、俸給には宿泊施設分が上乗せされた。彼はこのポストに就いているとき、友人たちのことを考えて、定期的を送金はしないという原則を立てた。彼が言うには、「私には友人が2百人いるかも知れない。そこで、私の報酬が2ギニーとすれば、私の権利を放棄することによって2百ギニー失うことになり、どの友人も2ギニー以上は手に入らなくなるのだ。従って、分け与えられる幸運な人と不遇をかこつ不運な人の釣り合いがとれなくなる」そうである。

スティールは『タトラー』紙の第1号を1709年4月22日に発行し、アディソンの寄稿は5月26日付けの紙面に載った。アディソンは12月23日付けまで手伝い、この新聞は1月2日で途絶えた。彼は彼の記事に署名を入れて特別扱いをするようなことはしなかった。『タトラー』紙廃刊後、約2カ月して、『スペクテイター』紙がこれにとって代わった。『スペクテイター』紙は『タトラー』紙と同じような一連の随筆を載せたのだが、『タトラー』紙ほどの一貫性の欠如はなく、より規則的な計画に基づいて、毎日発行された。このような仕事を見ると、書き手たちが自分たちの材料の豊富さ、あるいは文章を書く才を信頼している様子が伺える。彼らの仕事がその自信を裏打ちしたのである。しかしながら、彼らはその途上で多くの助け舟を見つけだしたのであった。単一の新聞を企てることは恐れるほどの仕事ではなかった。多くの記事が提供され、受け入れられた。

アディソンは党派の熱意を十分に備えていたが、スティールはその頃にはその熱意は失せていた。『スペクテイター』紙では発刊後ほどなく、筆者たちの政治的信条を明らかにした。しかしすぐに、党派性によってこれまでいかなる意見の相違も生み出さなかった一般的な話題および主題、例えば、文学、道徳そして家族生活といった話題を提供することによって幅広い賛同を得る決心を固めた。彼らはほぼ脱線することなくこの原則を忠実に守った。

『タトラー』紙および『スペクテイター』紙以前には、演劇関係の文筆家を除けば、イングランドには一般の生活について文をしたためる達人は存在しなかった。いまだかつて怠慢のひどさあるいは不躰な礼儀の改善、つまり、いつ口を開きいつ口を閉じるか、また、断り方あるいは応じ方を教えることに手を出した文筆家はいなかった。我々は大切な義務について教示してくれたり、哲学そして政治についての見解をまとめてくれる書物は望まなかった。日々の会話の流れに目を向け、その生活から通行人を傷つけはしないものの悩ますとげや針を取り除く「礼儀正しさの判定者」が不足していた。こういった目的のためには、勉強のためにではなく気晴らしとして読む手短な新聞の度重なる発行ほど相応しいものはない。主題が取るに足らなければ、文章は同様に短くなる。多忙な人は時間を割くことができ、暇な人は辛抱強さを見つけることができるのである。

王立協会は、人々の注意が不平不満に向かないようにさせる目的で、王政復古後直ちに設立されたと言われている。『タトラー』紙と『スペクテイター』紙もまた、同様の意図を備えていた。ホイッグ、トーリー両党が共に、声高で、不安定で、激しく、おそらくはその考えには明確な結末も期待できずにもっともらしい声明を出し、国民の関心を喚起していた時期に、両紙は発行されたのである。この新聞は政治的な論戦で頭が熱くなっていた人々に、より冷静で当たり障りの

ない意見を提供することになった。アディソンが仕事を引き継いだことによって、このふたつの新聞は当時の人々の会話にかなりな影響力を持ち、浮かれ騒ぐ人々および陽気な人々に、陽気なお祭り騒ぎと品位を結び合わせることの大切さを教えたのである。これらの新聞は、また、男女両性に、知識の優美さの初歩を教えた最初の規範の源のひとつとなったのだが、全体として決して失うことのできない影響力を持ったのである。

『タトラー』紙と『スペクテイター』紙は取り乱れた日々の交際に礼儀正しさと上品さを取り戻させた。両紙には文学と批評が付け加えられ、時にはその先輩格イタリアおよびフランスを凌駕した。そして、極めて正当な主張、威厳を備えた言語、最も大切な義務そして崇高な真実をちりばめて教示した。こういった論題は、幸いにも優雅な作り話、洗練された寓意物語などなど、変化に富み、また、さまざまな文体と工夫された適切な表現によって彩りが添えられた。

『スペクテイター』紙の中ででっちあげられたり組上にあげられたりしている人物のうちでアディソンお気に入りの人物はサー・ロジャー・ド・カヴァリだとバドセルは記録している。アディソンはこの人物についてはとても上品で識別力のある人物との考えを作り上げていた。そこで、スティールが無意識のうちに、この人物がテンプル法学院である女性と知り合いになり居酒屋に連れて行く様子を書いたとき、友人アディソンを大変憤慨させ、スティールは今後はサー・ロジャーのことは差し控えるとの約束をして彼をなだめざるを得なくなった。

このように、優雅で有益な随筆で構成され、広く販売されたので、当然、一般の賛同と広範な売上を想定できた。だが1日の売上部数は1680部を超えることはなかった。

翌1713年には『カトー』が劇場にかかったのだが、この年はアディソンの名声にとって大きな転換点となった。国中はそのとき党派のことで火がついていた。ホイッグ党に与する人たちはこの芝居の中で「自由」について触れられる一行ごとに、それがトーリー党に対する風刺だと拍手喝采した。一方、トーリー党側の人たちは拍手の音を響き渡らせてその風刺は感じられないのだとの意志を表明した。ボリングブルックの話がよく知られている。彼はブースを自分のボックス席に呼び、永久的な独裁者に対して、実に巧みに自由の大義を守った褒美として50ギニー与えたのであった。

このように、党派的な称賛の競い合いによって支えられた『カトー』はこれまでに見られないほど長期間にわたって上演された。そして、その作家アディソンは公演中は気持ちが落ち着かずまた満たされることのない孤独な状態で舞台の背後で歩き回るようになった。

この悲劇は確かにアディソンの非凡な才能を示す最も崇高な著作である。人々が長いと考える作品に関して、それは通常適切だと考えることになる。『カトー』は不当には考えられてはいなかった。つまり、この作品はドラマというよりはむしろ詩で書かれた対話であり、自然な情動あるいは人生においてあり得るまた起こり得る状態の描出というよりはむしろ、優雅な言葉で書かれた一連の正当な情趣なのだと考えられて来たのである。

『カトー』が舞台にかかっている間に、『ガーディアン』紙というもうひとつの日刊紙がスティ

ールによって発行された。この新聞に対して、時折あるいは前もって話があったかどうかは定かではないが、アディソンは多大の援助を施した。アディソンの記事には『スペクテイター』紙では「クリオ」という署名によって、そして、『ガーディアン』紙では「手」という署名をつけている。死後はじめて、スティールによって『ドラマー』の著者はアディソンだということが明らかにされた。

アディソンは公共の出来事に終始無関心であったわけではなかった。1707年、彼は特別に危急を要するものとして、『戦争の現状』、『ホイッグ審査官』そして『タリフ伯爵の公判』を書いた。

その後まもなく『スペクテイター』紙再刊の試みがなされた。しかし、不穏な時代であったことと読者が飽きたために、試験的に80号出した後で、廃刊に至った。これらは後になって8巻にまとめられた。これはおそらくそれまでのいかなるものにも比して貴重なものであろう。アディソンはその4分の1以上を担当した。再刊後は週3回の発行となり、記事には特殊な印は何も付かなかった。ティケルは556号から600号までのうちの24号をアディソンの筆としている。

『スペクテイター』紙には多くの寄稿者がいた。怠慢さゆえに、いつもあわてふためいていたスティールは自分が新聞を出す番になると、声高に手紙に救いを求めた。もっとも材料を豊富に持っていたアディソンは手紙はほとんど利用しなかったのだが。下書きや助言を頼りにし、彼は今ではこれまでの勉強の成果を吟味し完成させた。こういったものの中に『機知に関する随筆』、『想像力の楽しみ』そして『ミルトン論』などがある。

1714年、ハノーヴァー王家が王位につくと、アディソンの熱意が相応に報われると期待するのは無理からぬことであった。ジョージ1世の到着以前に、アディソンは摂政の秘書官になっており、ハノーヴァー王家に、女王がお亡くなりになり王位が空位になったとの通知を出すようにとの命を受けた。その仕事はアディソン以外のいかなる人にとっても困難なことではなかっただろう。アディソンは事の重大さに圧倒されてしまい、語句の選択に悩んだために、上品な言い回しを待ちきれない上院議員たちは官吏サウスウェルを呼び寄せ、通信文を出すように命じた。サウスウェルは直ちにありふれた実務的な文体で必要事項を告げ、アディソンにはあまりにも困難なことをやり遂げたことを自慢した。

アディソンは『自由保有権保有者』紙を発行するのに十分な資格を有していた。彼はこの新聞を1715年12月23日から翌年の半ばまで、週2回発行した。これは時には主張をし、時には陽気を振り撒きながら現体制を擁護するものであった。議論では彼に匹敵する者が大勢いたが、ユーモアの点では非凡な才を持っている彼に並ぶ者はいなかった。

1716年8月2日、彼はウォリック伯爵未亡人と結婚した。彼はとても長い間、熱心に求婚し、おそらくサー・ロジャーの尊大な未亡人に対する振る舞いとは似ても似つかぬ態度でもって、彼女を口説いたのであろう。ウォリック伯爵未亡人はしばしばアディソンの熱情を弄ぶことで気晴らしをしていたと思われる。彼は最初彼女の息子の家庭教師になることで彼女と知り合いになったと言われている。彼の口説きは最初は確かにおどおどしたものであったが、彼の名声と影

響力が増大するにつれて次第に大胆なものになっていった。そしてついには、未亡人はあるトルコの王女が結婚をするときの条件と似通った条件で、結婚を説き伏せられることになった。スルタンはその王女に「お嬢さん、私はあなたにあなたの奴隷としてこの人物を差し上げます」と言明したと言われているのだが。この結婚は、もし反駁されていない世評が信頼に足るとすれば、彼の幸福には何ひとつ付け加わらなかったのである。ふたりの間には対等なものではなく、また、対等にすることもなかった。彼女は常に自分の階級意識が抜けず、自分は彼に対して礼儀をわきまえる必要はなく、息子の家庭教師を遇するように接する資格があるのだと考えたのである。

1717年、アディソンはこれまでにない出世をした。国務大臣になったのである。彼はこれまでの実績そしてほかの官職での経験から、このポストを担う資格があるものと考えられた。しかし期待はしばしばそがれるものである。一般には彼はこの職分には不適切であったと認められているのである。彼は下院で演説することができず、政府擁護の役に立たなかった。官庁において指示を発布するとなると、必ずといっていいほど完璧な表現を見つけるのに手間取るのであった。要職につくことで獲得したものを、名声の点では失うことになった。経験によって自らの無力を知った彼は、1千5百ポンドの年金と引き換えに免職を求めざるを得なかった。

彼はここで正業に戻り、その一部は彼の死後出版されたのだが、「キリスト教」擁護に携わる仕事をした。彼は新たに詩篇の理想的な版を出す計画を立てたのである。これは彼がかつて英語辞書を作る構想を練ったこと、そしてまた彼がティロットソンを最高の権威を備えた文筆家と考えたことと関連がある。

しかしながら、アディソンは穏やかな研究に打ち込んで人生を締めくくることにはならず、最晩年には再び政治的な問題に首を突っ込むことになった。

偶発的なことだが、1718年から1719年にかけて、長年続いた友人アディソンとスティールの間でとても激しい論争が巻き起こったのである。サンダーランド伯爵は貴族の数を固定し、旧家が絶えない限り、王は新たな授爵を制限すべきであるという「貴族法案」という条例を提案した。古くからあるこの制度の崩壊を防ぐために、彼の政治的な情熱をペンは二つ返事で支持したが、スティールは『庶民』という小冊子を出して国民に警告を発する努力をした。これに対する回答として、アディソンは『オールド・ホイッグ』という冊子で応じた。その中では、スティールが当時庶民の擁護者として知られていたということは明らかにされていない。スティールは『庶民』第2号を出してこれに応じた。無知あるいは慇懃さであれ、いずれにしても、相手に対する個人的な通告をせずに自らを論点に閉じ込めたのであった。『オールド・ホイッグ』は『庶民』に応じ、小冊子を書くことを生業とするけちなディッキーに対する侮蔑の念を控えることができなかった。しかしながら、ディッキーは友人に対する確固たる崇拝の念を失うことはなかった。彼は『カトー』の数行を引用することで満足した。これは直ちに発覚し意見された。この「貴族法案」はこの会期中には保留となり、つぎの会期が始まるまでにはアディソンはこの世を去っていたのである。

読者はひとり残らず、あれほど長年にわたって信頼と親愛に包まれ、関心と考えは一致し、協力して仕事をして来たこの二人の傑出した友人が最後でとげとげしい敵対関係になってしまったことをきっと残念に思うに違いない。こういった論争はルカヌスの言を借りれば「思い上がった戦い」であった。何故党派は他の擁護者を見つけることができなかったのか。ともあれ、我々は不確かな人間関係の中に友情の不安定さという項を数え込むよう定められているのであろう。

今やアディソンのこの有益な人生にも結末が近づきつつあった。彼はこのところしばらく息切れに苦しんでいた。そして今では、この息切れは水腫のせいでさらに悪化していた。彼は危機的な状態が迫っているのを知って、自らの指針と信仰に従順になって死を迎える心の準備をした。

じらじらと衰弱していくこの時期に、彼は会いに来てくれることを願ってウォリック伯爵の書信をゲイに送り届けた。ここしばらく彼のもとを訪れていなかったゲイ氏はこの呼び出しに従い、とても親切に迎え入れられた。アディソンはそのとき彼に、自分はあなたを傷つけた、体が回復したら、その償いをすると語った。アディソンはいかなる危害かは説明しなかったし、ゲイにも何のことか分からなかった。だが、それは彼のなんらかの昇進がアディソンの介入によって抑えられたということだったのではないかと考えられる。

ウォリック卿はだらしない生活を送るおそらくはいい加減な考えをもった青年であった。そのような彼に対して、アディソンは尊敬の念を欠いていたのだが、非常に熱心に彼の教化に努めて来た。だが、彼の意見も忠告もなんら効き目がなかった。しかしながら、ひとつの実験が試された。アディソンは死期が近づいていると分かったとき、若き伯爵に立ち寄るようにとの依頼をした。そして、とても思いやり深く最後の訓戒を聞き届けてくれることを願って、「私はキリスト教徒の最後を見届けてもらうべくあなたをお呼びしたのです」と彼に語った。

ティケル氏に彼の著述の出版の指示を出し、死の床でそれを友人クラッグズ氏に献呈して、アディソンは1719年6月17日、娘ひとりを残してオランダ館で死去した。

彼の美德については、党派への憤慨が反道徳的行為へとつながらなかったということで十分な証拠となる。彼は死後になって初めて称賛されるような人物ではなかった。彼の長所はあまねく知られていたので、無競争で彼が選挙に当選したのを見たスウィフトはもし彼が王に自分のことを申し出ていたなら、ほぼ拒絶されることはなかっただろうと付言した。

党派に対する彼の熱意は敵対者の長所に対するやさしさを失わせることはしなかった。アイルランドで秘書官であったとき、彼はスウィフトとの知己を中断させなかった。

彼の習性つまり外面的な物腰については、彼ほど頻繁に小心で陰気で無口だと言われたことはない。彼の友人たちはこの寡黙さをとても穏便な言い方で謙虚さと言ったが。スティールは非常に優しく「美点を包み隠すマントである例の際立った内気さ」と述べている。また、チェスターフィールドは「アディソンは自分が出会った中で一番小心で不器用な人物だ」と断言している。アディソンは自らの会話の欠陥について語るとき、しばしば自分から知的財産を顧慮してよく「ポケットに1ギニーなくても、1千ポンド振り出すことができる」と語った。

彼は当座の支払いに困っており、しばしばその不足によって邪魔が入り、苦しんだ。つまり、彼はあらゆる証言が一致してそのことを証明しているのだが、異常かつ見苦しいほどの小心さによって抑圧を受けたのであった。チェスターフィールドの描写はおそらく誇張したものであろう。話術および実生活には極めて稚拙だと思われており、財産も盟友関係もない彼は自らの有用性と器用さによって国務大臣となった。そして、彼は長期間にわたって機知と文筆界で最高の地位に君臨していただけでなく、官庁の最も重要な仕事をこなして47歳で死去した。

彼の生きた時代には、彼の頑迷なまでの寡黙さを嘆く理由があった。スティールによると「彼はユーモアの才にかけては彼の右に出る者はいなかったし、ユーモアをこのうえなく楽しんだので、世間と隔絶して彼と一晚過ごした後、私はテレンティウスとカトゥルスとの懇意な知人と楽しく話をしたのだと。彼には機知と人間性が備わっており、ほかのいかなる人にもまさる洗練されかつほれほれとするユーモアで会話に磨きがかかるのであった」ということである。これは友人の優しさである。好敵手の言に耳を傾けてみよう。ポーブによると、「アディソンの会話には他の人にはない何か魅力的なものがある。でも、これは親しい人との場合に限られるのである。見知らぬ人の前では、つまり、見知らぬ人ひとりを相手にする場合には、彼は固く口を閉ざして威厳を保つ」のであった。

この謙虚さは彼の長所に対する極めて高い評価と決して矛盾しなかった。彼がポーブの詩才に対する広く行き渡った名声に非常に苦しんだと考える根拠は何ひとつない。また、何か陰険な行為によってその名声の妨害をしようとしたと考える確固とした根拠もない。ポーブは彼が恐れたただひとりの人物ではあったが、彼が知らぬ間に傷つけた人物はポーブだけではなかったのである。

非常に広範な知識について彼はいかなる証しも提出しなかった。彼は科学に対する若干の知識を備えていたように思われる。また、彼はラテン語とフランス語以外はほとんど勉強しなかったと考えられる。彼はほとぼしる知性のおかげで、付随的な感情をほとんど必要としなかった。つまり、機知のおかげで彼は常に場面、場面で何が求められているかが分かったのである。彼は人間生活という重要な書物を鑑識眼をもって読んでいた。そして、見せかけの深層から表層に至るまで人間の心が分かっていた。

彼は非常に筆が立ったが、校正は遅く周到であったとポーブが言明している。『スペクテイター』紙の記事の多くは非常に短時間で書き上げられ、すぐさま印刷に回された。そして閲読にあまり時間をかけなかったのが彼の利点に思われた。

ポーブはアディソンの結婚するまでの日々の過ごし方について詳しく説明している。彼はバッジエル、そして多分フィリップスと同じ屋根の下で暮らしていたのだろう。彼の主だった友人はスティール、バッジエル、フィリップス、ケアリー、グヴェナントそしてブレット大佐であった。彼はいつもこの友の誰かと朝食を共にした。彼は朝のうちはずっと勉強した。そして、正餐は居酒屋でとり、正餐がすむとバットンの所に出掛けて行った。

バットンはウォリック伯爵夫人の家で召使をしていたことがあった。彼はアディソンの後援の下にコヴェント・ガーデンから2軒ほど先のラッセル通り4番地でコーヒーハウスを経営していた。この店に当時の才人たちがよく集まったのであった。伯爵夫人のことで悩んでいたときには、アディソンはこのコーヒーハウスから仲間を引き揚げたと言われている。

アディソンはこのコーヒーハウスから再び居酒屋へと向かい、しばしば夜遅くまで居座り、ワインをたっぷり飲むのであった。酒に、不満が慰めを、臆病が勇気を、内気が大胆さを求めたのであった。おそらくアディソンは最初は、しらふの時には卑屈なまでに内気なため、酒を飲んだときに獲得した解放感から過度の暴飲へと引き込まれたのだろう。自分よりも劣っていると思っている人たちの存在に圧迫感を覚える人は、それだけ自らの会話能力を解き放ちたがるものである。酒神バックスの助力を求める彼は酒の奴隷になることから身を守ることができた。

徳性に関する彼の書物からなんらかの判断が可能だとしても、清廉と美德以外の何ものも見つからないだろう。人間に対する知識を見てみると、実際のところ、アディソンの知識ほど広範なものでなくとも、執筆することと生きることとは似て非なるものだということが分かるだろう。美德を称賛する多くのひとはただ単に称賛するに過ぎないのである。だが、アディソンの公言と実践との間には大きな食い違いがなかったのだということを信じる根拠がある。というのは、例の党争の嵐が吹き荒れている最中に彼の人生の大半を過ごし、彼の地位は顕著なものとなり、彼の活動は侮りがたいものとなったのだが、友人たちが口にする彼の人格は決して敵対者が口にするものと矛盾しなかったのである。彼は自分と関心あるいは意見が一致する人たちに対して、尊敬だけでなく親愛の情を抱いた。そして、激しい対立関係から彼に背を向けることになった人たちに対しては、彼はその人たちの好意を失うことになったのだが、変わらず敬意を持続けた。

彼は美德と信仰の面で機知を用いた。彼は自ら機知を適切に用いただけでなく、他人にもそれを教示した。そして、機知はその当時から広く理性と真実のために貢献して来ているのである。彼はこれまでながらく陽気さと悪徳、行儀作法の気軽さと節操のだらしなさを結び付けて来たそのような偏見を払拭した。彼は美德に威厳を取り戻し、無知を恥じ入らないようにと教えた。これは文学的特質を「ギリシャ、ローマの名声に勝るほど」高めることである。天賦の才能は知的喜びを純化し、浮かれ騒ぎと無作法そして機知と放縦とを識別したことに勝る至福を獲得することはできない。一連の文筆家に幸福のために優雅さと陽気さをもたらすように教えたのであった。そして、さらに一層畏敬の念に満ちた表現を用いて「多くの人たちの目を公正さへと向けさせた」のであった。

アディソンの韻文には洗練さと品位がある。彼の文は卓越さを獲得するほど力強くはないものの、とても思慮分別があって過ちを犯すことのできない心の持ち主の所産である。彼は時々人目をひく一行あるいは際立った一節を書くが、全体的には熱情的というよりはむしろ暖かいものであり、力強さというよりも器用さを示している。とはいえ、彼は我が国で正しい文章を書く模範となった最も初期の人物のひとりであった。

現在では、彼に批評家の名前を与えようとする人はほとんどいない。彼の批評は科学的というよりはむしろ試験的つまり経験的だと非難されている。そして彼は原理原則によるよりむしろ趣向によって論点に裁定を下したと考えられている。

他人の労力によって賢明になった人たちが、自分たち自身の努力をほんの少し付け加えることで、師を見下すことになるのは稀なことではない。アディソンは今やおそらくは彼の欠陥には気づかなかった人たちから見下されているのである。それも彼のお陰で手に入れた見識から。現民族にたいする深遠な観察者たちがアディソンに対する自分たちの優越性にあまりにも揺るぎない基礎を置く前に、その人たちにオヴィディウスに関する論評を考えていただこう。その中にいやというほど鋭くかつ洗練された批評のお手本が見つかるのである。同じく、彼らにはアディソンの『機知論』、『想像力の楽しみについて』を精読していただきたい。これらの中では、彼は例えば、彼を見下すひとには容易に手に入らないような巧みさと優雅さでもって、芸術の基礎を人間性に置き、創造の原則を人間の精神に内在する気質から引き出しているのである。

人生と礼儀作法を描写する人物として、彼はおそらく最も初期の第一人者であると考えられるに違いない。彼のユーモアは、彼特有のものだが、非常に手際よくちりばめられているので家庭的な一齣や日々の出来事に目新しさという美質が付与されることになる。彼は「決して謙虚さの度を超すことはなく」、また、真実に違背してまで陽気さと驚異を持ち上げることもしない。彼の人物は歪むことなく、また、挑発行為に当惑することもない。彼は人生を非常に忠実に模写しているので、創作とは言いがたい。だが、彼が提示するものには非常に多くの独創的なものが含まれているので、完全に想像力の産物ではないとは考えにくいのである。

知恵の師として自信をもって彼をお手本にすることができる。彼の信仰には狂信的あるいは迷信的なところは何ひとつない。彼は軽々しく信じたり、いわれなく懐疑的になるようには見えない。彼の徳性は危険なまでに放縱でもなく、手に負えないほど厳格でもない。著者を喜ばせるということは読者の真の関心に託すために、あらゆる空想力の魅力と説得力のある主張が用いられている。真実はときには視覚の幻影として示され、またあるときには寓意の形で半ば覆い隠されて登場する。そしてときには空想の衣服をまとうて注意を引き寄せ、またあるときには理性の信任を受けて前に進み出る。真実は幾多の衣装をまとい、すべて心地よいのである。「さまざまな衣服があり、すべて体裁がいい」のである。

彼の散文は中間的な文体の手本である。つまり、重々しいテーマでは形式的にならず、軽い場合には卑屈にならないのである。用意周到さを伴わずに上品であり、入念に手を入れなくても正確なのである。とげとげした言葉や文がなく、常に公正で滑らかな文体となっている。アディソンは優雅さを手に入れようとして道からそれることはない。彼は野心的な勲章は何ひとつ欲しがらないし、また冒険的な刷新も試みない。彼が書いたものは常に光り輝いてはいるが、意想外な輝きに包まれて燃え上がることは決してない。

彼が主として努めたのは言い回しのもつあらゆるとげとげしさと苛烈さを避けることだったよ

うに思われる。それ故、彼は変化と前後関係を表現するときには時折冗長になる。またあるときには、過剰なほど会話の言い回しに傾斜することがある。だが、もし彼の言い回しがさほど慣用的でなかったとしたら、純粋にイングランド英語特有のものが多少失われていたかも知れないだろう。彼は企てる通りのことを成し遂げた。彼は弱くはなくまた精力的になりたいとも思わなかった。彼は迅速でもなくよどむこともない。彼の文章は豊かさを目的とはしていなくまた簡潔さに影響も及ぼしていない。彼の掉尾文は、きちんと洗練されてはいないが、流暢ですらすらしたものである。打ち解けてはいるが粗雑でなく、優雅であるがけばけばしくない英語の文体を獲得しようとする人は誰でも、夜となく昼となくアディソンの書物に傾注しなくてはならないのである。

献 辞

イーブシャム男爵ジョン・ロード・ソマーズ閣下

謹啓

この新聞をあまり完全でなくまた一般に価値が認められていない人に献呈致しますとすれば、私は不偏不党の「観察者」の役割を演ずることにはならないと考えます。

完全な人格者でなければどなたもこの新聞の至当な後援者足り得ないのであります。この新聞におきましては、美德と知識を高め、社会にとりまして有益なもの、また光彩を添えるものを助言致しまして、人間生活を啓発しかつ磨き上げるよう努めております。

私が今閣下に表明しています敬意は、称賛を受けるに値しますのにしきりに称賛を遠ざけようとなさっているお方にとりましては、ある種の暴力的行為を申し出ていることにほかならないことは承知致しております。しかし閣下、おそらく閣下の思慮分別をもってしましてもこのことは常に杞憂に終わる事柄でありましょう。

正義、公平無私、沈着さ、国を想う熱意、そして他人を変えさせる説得力に溢れた雄弁、これらは貴重な特質であります。国民が閣下の並外れた資質を褒め称えるのを憚むほどには閣下の意向に従うとは思われません。閣下が尽力なさった多くの国政の点から見ましても、功績を隠そうとなさるのは無駄であります。閣下の願っていることを実行なさってください。成功のみがその美德を公正に評価することになるのですが、今日の人々は閣下の美德につきまして話題にすることでしょう。

他の人たちは対立の中を進んで行き、功名心の点で利害を主張するのであります。しかし、閣下の大いなる能力は権力の座を呼び寄せ、昇進を受け入れるよう執拗に迫っているのであります。閣下がそうなられてもなんら不思議ではありません。閣下は国王陛下のために、特に我が国体、そして欧州全般の利害に対する的確な理解をはじめと致しまして、古代ギリシャ・ローマの芸術および政治に対する知識をもたらすことができるのです。このことに対して私はまた閣下に対する確たる威厳の念を付与しなくてはなりません。控え目に言いまして、閣下は常に閣下に贈ら

れてきました素晴らしい栄誉にふさわしかったのであります。

英国国教会がかつて遭遇したことのないほどの危機に瀕しましたとき、つまり、その高位聖職者の糾弾の際に、どれほど閣下のお陰をこうむったかはよく知られていることで御座います。そして、前国王および現国王の御代におきまして、政権が閣下の助言と知識の恩恵を享受して来たこともまたしかりです。

しかし、国民が閣下の施政から享受してきました大きな利益を枚挙することはこの種の献辞にというよりもひとつの歴史にとってより相応な仕事となることでありましょう。

閣下は閣下が担われました最も重要な役職におきましてもそうでありましたが、閣下の私生活におきましてまた卓越していらっしゃるの明白であります。従いまして、私は閣下に親交をお認め頂いたすべての人たちに、閣下がお与え下さる喜び、教養ある学問における閣下の優雅な趣味、閣下の素晴らしい人間性と礼儀作法、そして、閣下と言葉を交わすと誰でも自分の才能を卑下することなく、いつの間にか閣下のことを自分よりも好きになってしまう閣下に特有の驚くべき感化力につきまして、お話したいと思います。でも、私が閣下に認められますすべてのことに注意を払うと致しましても、卓越なさったいかなる特質につきましても申し上げるべき目新しいことは何ひとつ御座いません。

敬具

閣下の最も従順にして献身的な卑しい下僕「観察者」

第1号 1711年3月1日(木曜日)

【アディソン】

あるものは光りで始まり、煙りで終わる。

またあるものは煙りから輝かしい光りを生み出す。

そしてさほど予期させないで

めくるめく奇跡でもって私たちを驚かす。(ホラティウス)

私の見るところでは、読者というものは著者が陰険な人物かそれとも公明正大な人物かどうか、性格は温厚かそれとも怒りっぽいか、また既婚か未婚かということが分かるまでは、喜んで本を読むということはめったにないのです。また、読者は著者に対する正しい理解に大いに貢献する同種の詳細な点も知りたがりです。読者にとっては極めて自然なこの種の好奇心を満たすために、私はこれからの執筆への前口上として本日および明日の紙面をこれに充てようと考えています。そこで、2日間の紙面において、この仕事に関与する数名の人物について若干の解説をすることに致します。編集、分類、そして校正といった主たる労は私にかかってまいりますので、私の真価を十分に発揮して自分自身の来歴からこの仕事を開始しなければなりません。

私は世襲的な地所をほんのわずか持った家に生まれました。わが家の地所のある村の伝承によりますと、わが家の地所は現在に至るまでウィリアム征服王の時代と同じ垣根と溝で境界が引かれているということです。そして、その地所は6百年間にわたって父から息子へと、畑一枚、牧草地一枚失うこともまた新たに取得することもなく、寸分変わらずそのまま受け継がれて来たのです。私の生後3カ月で母が亡くなるとき、判事をお産する夢を見たとの話があります。これは当時わが家に関わっていた訴訟に由来したのか、それとも私の父が治安判事であったことに由来するのか私にはよく分かりません。というのは、そのことが私が将来手に入れるなんらかの名声の前兆だったのだと考えるほど私は独り善がりではないからです。もっとも、周りの人たちはその夢にかこつけてそのように解釈したのですが、この世に生を享けたときの私の沈着な態度、そして終始そうしてきたことは母の夢を味わっているように見えました。何故なら、母が私にいつも言っていたことなのですが、生後2カ月になるかならない頃に私はガラガラを投げ出し、そのガラガラの鈴を外すまでそれを手にしないということでしたから。

幼児期に関してはこのこと以外に特筆すべきことは何もありませんので、何も言わないでやり過ごすことに致します。未成年期の私はとても陰気な若者との評判だったと思います。でもいつも先生のお気に入りでした。先生はよく「君の資質はしっかりしたものであり、十分長持ちするだろう」と言っていました。とても根深い無口さが目立たないうちに、私はほどなく大学生になりました。大学での勉強のときを除きますと、8年間で口にしたのはかろうじて百語だったので。そして実際、これまで一気に文を3つ続けてしゃべった記憶はありません。学生の間は、と

でも勤勉に研究に精力を傾注しましたので、学究的あるいは古典語以外の場合でも、名高い書物で私の知らないものはほとんどありません。

父が死亡したとき、私は外国の地を旅する決心をしました。それで、それを示す機会があればの話ですが、大変な学識を積んだという奇妙で訳の分からない特別研究員という推薦状を貰って大学をやめました。知識に対する飽くなき渴望は私を欧州のあらゆる国々へと足を向けさせました。そこには見るべき何か目新しく見知らないものがありました。のみならず、私の好奇心はこの上なく高められ、エジプトの古代の文物に関する優れた人たちの論争を読んだことがありましたので、ピラミッドの大きさを測ろうとしてかのグランド・カイロまで足を延ばしました。そして、まさしくその地点に身を置くとすぐに、私は大いに満足して帰国の途につきました。

私は後半生はロンドンで過ごしてきました。ロンドンでは、私のことを知っているえり抜きの友人は6人を超えないのですが、足しげく公共の場に出掛けております。この友人につきましては明日の新聞でもっと詳細にお話し致します。通常の盛り場¹⁾へはそんなに顔を出しません。時々政治家たちの集っている「ウィル・コーヒーハウス」²⁾に首を突っ込み、そして小さく輪になった聴衆の中で交わされる話に聞き耳を立てます。また時には「チャイルド・コーヒーハウス」³⁾でパイプをくゆらせ、ポストマン紙⁴⁾以外は何も気にしていないように思わせながら、この室内のテーブルで交わされる話を立ち聞きするのです。日曜日の夜になると「セント・ジェームズ・コーヒーハウス」⁵⁾へ行きます。そして時々奥の部屋で行われているささやかな政治集会に参加します。人びとは耳を傾け向上するためにそのコーヒーハウスに集うのです。「ギリシャ・コーヒーハウス」⁶⁾、「ココア・トゥリー・チョコレートハウス」⁷⁾、そしてドゥルーリー・レイン劇場⁸⁾およびへ

-
- 1) コーヒーハウス。ミエージュの計算によると、1707年にロンドンにはタヴァーン（居酒屋）が2百軒、エールハウスが5千軒、コーヒーハウスが1千軒あった。コーヒーハウスはくつろいだ話をしたり、新聞、議決事項、週刊あるいは臨時に発行される印刷物を安い料金で読むのにとりわけ好都合。ミッソンもまた「この上なく便利であり、色々なニュースが入り、暖炉もあり、時間も好きなだけ居てよく、コーヒーが飲めるし、友人とあって仕事の話ができる。それもすべて1ペニーで済む」と述べている。
 - 2) ウィル・コーヒーハウス。店名は経営者ウィル・アーウィンの名前に因んでつけられており、コヴェント・ガーデンのラッセル・ストリートとボウ・ストリートの北西の角にあった。以前は政治家よりは才人の溜まり場であった。ドライデンが晩年出入りしたのはこの店であった。
 - 3) チャイルド・コーヒーハウス。セント・ポール寺院の境内にあり医者は牧師はもちろん、作家や本屋の溜まり場であった。アディソンの言によると、トーリーの雰囲気支配的であった。
 - 4) ポストマン。これは1695年に創刊し、週3回発行の新聞であり当時の有力紙のひとつ。この頃はフランス人プロテスタントのジャン・ド・フォンヴィーヴが執筆、スウィフトのいとこドライデン・リーチが発行。守備範囲は広がったが、トーリーからはホイッグと見られていた。
 - 5) セント・ジェームズ・コーヒーハウス。セント・ジェームズ宮殿のそばのセント・ジェームズ・ストリートの西側にあり、ホイッグの衛兵や洒落物たちが出入りした。ホイッグ党の政治家や議員たちが集まり、非公式に党の戦略を議論した。
 - 6) ギリシャ・コーヒーハウス。テンブルのそばのストランドのデヴェルー・コートにあり、ロンドン最古のコーヒーハウス。レヴァントから帰ったイギリスの商人の召使であるギリシャ人が1652年頃

イマーケット劇場⁹⁾でも私の顔は同様によく知られています。私はここ10年以上、取引所¹⁰⁾では商人に間違われています。そして「ジョナサン・コーヒーハウス」¹¹⁾での株式仲買人の集まりではユダヤ人として通用します。要するに、人々が集まる場所ではどこでも、私はクラブ以外では決して口を開かないのですが、常に人々とうまくやっています。

このようにして、私は一人間としてというよりはむしろ人間の観察者としてこの世に存在しています。このことによって、私は実際的なことにはちょっかいを出さず、自分自身を思索的な経世家、兵士、商人、そして職人にしてきたのです。夫ないし父親論に私は非常に精通しています。そして人々の経済、事業、遊びの過ちをそれに従事している人たちよりもよく認識できます。何故なら、見物人には試合中の人が見逃ししやすい弱点が分かるからなのです。私はどちらの党派にも激しく傾倒したこととはなく、双方の敵愾心によって自らの立場を無理やり表明させられない限り、ホイッグ、トーリーのまさに中立を守る決心をしています。要するに、私はこれまで傍観者の役を演じてきているのです。これは私がこの新聞で保とうとする立場なのです。

以上、私は読者に私が着手致しましたこの仕事にまんざら相応しくないわけではないということを知っていただける程度には私の来歴と性格について述べました。私の人生および冒険におけるその他の点に関しましては、今後の紙面において機会を見つけて差し挟みます。一方、私がどれだけ見聞し、読んだか斟酌すると、私は自らの寡黙を非難し始めるのです。談話で私の胸の内を十分に伝える時間も気持ちもありませんので、死を迎えないうちに、書くことでそうする決心をしたのです。そして可能ならばそれを活字にすることにしました。私が発見したこれほど多くの事柄が寡黙な人物の所有になっているのは残念なことだ、と私は友人からよく言われます。従ってそのような理由から、私は時代を同じくする人びとのために紙面一杯の考えを毎朝公表致します。そして我が国の転換ないし向上になんらかの貢献が私にできれば、あの世からお呼びがかかったとき、私の人生は無駄ではなかったのだという密かな満足感を抱いてあの世へと旅立つことでしょう。

私が本日の新聞で語っていない非常に大切な点が3つあります。その点に関しましては、いくつかの重要な理由から、少なくともしばらくは私は自分の胸の内に留めておかななくてはなりません。その3点とは、つまり、名前、年齢そして住まいのことなのです。本当は無理のないことは

に開いたと言われている。王立協会の教授陣や特別会員、弁護士、ギリシャ語の学者たちの溜まり場であった。

7) ココア・トゥリー。ベルメル街にあり、過激なトーリー党員が溜まり場としたチョコレートハウス。

8) ドゥルリー・レイン劇場。1672年の火災後1674年にクリストファー・レンによって再建された。

9) ヘイマーケット劇場。ヴァンプルーとコングリーヴの指導下に建設され1705年にオープンした。1709年11月23日以来スペクテイター発刊の時期には、劇はドゥルリー・レイン、オペラはヘイマーケットで上演された。

10) 取引所。1711年にはこの名前がつく建物は王立取引所、新取引所、エセクター取引所の3つあった。

11) ジョナサン・コーヒーハウス。王立取引所近くのエクスチェンジ・アリーにあり、商人たちの溜まり場。

何事でも読者を喜ばせてあげたいのです。でも、以上の3点に関しましては、これらが私の新聞の装飾のために大いに資するだろうということは分かっているのですが、私はそれらをみなさんにお伝えする決心がまだできないのです。この3点を公表致しますと、私は実際長年にわたる隠れた存在から明るみに引っ張り出されることになるでしょう。そして、私は公共の場所で、これまで常にととても不愉快と思ってきた多くの人の挨拶と丁寧な振る舞いのもとにされされるでしょう。何故なら私が受ける最大の苦痛は話しかけられること、そしてじろじろ見られることなのです。同様の理由から、私は肌の色や服装もとても大切な秘密としています。あり得ないことではないのですが、私が着手したこの仕事の進行過程でこの2点も明らかにするかも知れません。

本日の新聞では私自身のことを以上詳しく述べましたので、明日の新聞ではこの仕事で私とかわりのある紳士諸兄の説明を致します。何故なら、これまでにそれとなくほのめかしましたように、他の重要な事柄同様、クラブでそのように予定され、また話ができていますのですから。とはいえ、私の友人たちから私が前面に立つよう約束させられていますので、私と通信しようとする気持ちのある人はリトル・ブリテンのバックリー氏宅、「観察者」宛てに手紙を書いて頂きたいのです。さらにまた、私たちのクラブは火曜日と木曜日にだけ会合をもつのですが、この新聞が国の進歩に貢献しているかどうか点検するために、私たちは毎晩集まりをもつ約束をしているということを、読者にお知らせしておかなくてはなりません。

第2号 1711年3月2日（金曜日）

【スティール】

少なくともさらに六人のものが賛同する。（ユヴェナリス）

私たちのクラブのまず最初の友人はウスターシャーの紳士です。この紳士の家系は古くから続き、准男爵で名前をサー・ロジャー・ド・カヴァリと言います。彼の曾祖父はかの有名なカントリードダンスを編み出しました。そのダンスには彼の曾祖父の名前に因んだ名前が付けられています。ウスターシャーのことを知っている人なら誰でもサー・ロジャーの資質と美点はとてもよく分かっています。彼は特異な行動をとる紳士ですが、その風変わりな行動は彼の良識に由来するのです。彼は世の中が間違っていると考えている訳ですから、世間の礼儀作法とは矛盾したものとなります。しかしながら、彼は嫌みなこと、頑迷なことは何もしませんので、この彼の気性は敵を作りません。様式や形式に拘束されないことで、彼は彼を知っている人たち全員をいつでも喜ばせ、かつ、恩恵を施すことができるのです。彼はロンドンにいたときはソーホー・スクウェア¹⁾に居を構えます。彼は隣の州のあるつむじ曲がりの美貌の未亡人との恋がかなわなかったと

1) ソーホー・スクウェア。オックスフォード・ストリートとトッテナムコート・ロードの交差点の南西の一帯で、1680年頃から高級な住宅地となる。アン女王の時代にはロンドンで最も品のよい地区であった。

いうことで、独身を通してと言われています。サー・ロジャーは失恋するまではいわゆる立派な紳士で、しばしばロチェスター卿やサー・ジョージ・エサリッジと夕食をともにしていました。彼はロンドンに初めてやって来たとき決闘をしました。コーヒーハウスで威張り屋ドーソンが自分のことを若造と呼んだことで彼を蹴飛ばしました。しかし、彼は前述の未亡人から冷たい仕打ちを受けたので、1年半にわたって、とても真剣でした。生来陽気な気質の彼はやっとその痛手を克服したのですけれど、自分のことには無頓着になり、それ以後は身繕いをしなくなりました。彼は相変わらず肘鉄砲をくったときに流行っていたのと同じコートとダブレットを着用しています。これは初めて着てから12回流行り廃れがあったのだと彼はとても愉快地私たちに語ります。サー・ロジャーはあの無慈悲な麗人のことを水に流してからは、乞食やジブシーへの施しの問題でしばしば気を悪くしたと伝えられるほど、欲望が控え目になったと言われています。しかし、この風聞は友人たちからは真実というよりむしろからかいだと考えられています。彼は今では快活で陽気で心の暖かい56歳になっています。そしてロンドンと田舎に立派な家を構えています。また、彼は人間がとても好きです。彼の行動にはとても陽気なところがありますので、どちらかというところと尊敬されるというより愛される人物なのです。彼の賃借人たちは豊かになり、召使たちは満足しているようで、娘さんたちはみんな彼に愛を告白し、若者たちは彼と一緒にいることを喜ぶのです。家に帰ると彼は召使たちを名前呼び、2階へ上がるまでずっと話しかけるのです。私はサー・ロジャーが特定治安判事であることを漏らさないようにしなくてはなりません。彼は四季裁判所の法廷ではとても有能に判事の職責を果たします。そして3カ月前には、狩猟法可決の釈明をして大きな拍手を浴びました。

私たちの間で尊敬と威光の点でサー・ロジャーの次にくる紳士はインナー・テンプル法学院のメンバーでこの紳士もまた独身です。この紳士はとても高潔で、機知、知力を存分に備えた人物です。彼は自らの嗜好からではなくむしろ気難しい老いた父親の意向に従って、彼の住まいを定めています。彼は法学院では土地法の勉強をし、その方面ではすべての法学院の中で最も学識のある人物となっています。彼はリトルトンやクックのことよりアリストテレスやロンギノスのことをよく理解しています。彼の父親は近隣の結婚約定書、借地契約、保有権に関する質問を送ってきます。そういった質問に対してまとめて面倒を見、事務弁護士と意見が一致します。彼は情念そのものについて研究しています。情念から生まれる人々の間の論争を調べているときにはなおさらそうです。彼はデモステネスやキケロの演説ひとつひとつの主張が分かっています。でも我が国の法廷ではそれは必要ありません。彼を愚か者と思う人は誰もいませんが、親友以外は誰も彼がそれほど機知に富んだ人だとは思いません。この性向のお陰で彼は私心がなく同時に人当たりの良い人物となっています。彼の意見は仕事からの意見はほとんどないので、その大半は座談に相応しいのです。本に対する彼の好みは今の時代にはやや公正すぎます。彼はあらゆるものを読んでいますが、ごくわずかししか認めません。彼は習慣、礼儀作法、行状、古典作家の著述に精通していますので、現代の世の中で起こることに対してとても鋭敏な観察者となっています。

彼は卓越した批評家であり、芝居の時間は仕事の時間でもあるのです。きっかり5時に彼はニュー・インを通り抜け、ラッセル・コート²⁾を横切り、芝居が始まるまで「ウィル」で時間をつぶします。ローズ・タヴァーン²⁾に入るときには靴を磨き、理髪店で髪に髪粉を振って貰います。これは観劇中の観客のために思っていることなのです。何故なら、役者たちは彼を満足させようと意気込んでいるからなのです。

次に重要な人物はシティーでとても名高い商人サー・アンドリュー・フリーポート³⁾であります。この人は疲れを知らない働き者で、的確な判断力があり、経験豊かな人物です。彼の商いに対する考えは気高く高潔です。金持ちは誰にでも、もしその人が金持ちでなければなんてことのない何か人を巧みに茶化すようなところがあるのですが、彼は海を英国の共有地と言います。彼はあらゆる地域との交易に通じており、武力で領土を広げるなんてことは愚かで野蛮な方法だと言うことでしょう。何故なら、真の力は学芸と勤勉によって獲得することができるからです。もし我が国の通商のある部分がうまく耕されたら、ひとつの国から儲けるべきで、また別のものは別の国から儲けるべきだと、彼はよく主張します。武勇よりも勤勉の方が永続的な取得物になり、武力よりも怠惰の方が国家を荒廃させるのだということを彼が立証するのを私は聞いたことがあります。彼には儉約にかかわる格言が数多くあります。その中で最もお気に入りの格言は「塵も積もれば山となる」です。将官級の商人の方が学者よりも交際相手としては愉快です。サー・アンドリューは生来気取らない雄弁さを備えていますので、彼の明快な話は他の人の機知が与えるのと同様の喜びを与えてくれます。彼は一代で財産を築きました。彼は自分が他の人よりも豊かになったのと同じように簡単に、イングランドは他の王国よりも豊かになることができると言います。もっとも私はやはり彼については彼の船を本国に進める以外の方位は羅針盤にはないのだと言うことができるのですが。

クラブではサー・アンドリューの隣にはとても勇敢で理解力に優れてはいますがこの上なく謙虚な紳士セントリ大佐が席を占めます。彼は十二分に値するのですが、人目につくほどには自分の才能をひけらかそうとしないそんな人物のひとりです。彼はしばらく大佐をしており、数度の戦闘、そして攻囲ではとても勇敢に立ち向かいました。でも、彼にはわずかばかり地所があり、

2) ローズ・タヴァーン。コヴェント・ガーデンのそばのラッセル・ストリートにあり、ドゥルーリー・レイン劇場に行く人たちの溜まり場。

3) サー・アンドリュー・フリーポート。台頭するホイッグ党系の商人の代表としてのサー・アンドリューはスペクテイターが創造した人物としてはサー・ロジャーの次に記憶に残る人物である。彼の商いに関する高潔で寛大な考えはしばしば地代の重要性を唱える幾分偏屈なサー・ロジャーの旧式な考えと対比される。商人階級は当時トーリー党よりの物書きから中傷の標的にされていたので、サー・アンドリューの創造は中傷に対する応戦としての都合のよい手段となるが、一方でスペクテイターが政治的には中立を守るという公約には違反することになる。イングランド銀行の創設者ウィリアム・パターソンと1711年ロンドン市長サー・ギルバート・ヒースコート²⁾の二人がサー・アンドリューの原型になったと考えられている。この名前は18世紀後半に経済関係の記事を書く人たちからしばしば筆名として利用されることになる。

サー・ロジャーの次の後継者なので、誰ひとり彼の長所にうまく反応を示すことができないそんな生き方をやめました。彼にはどこか兵士でも廷臣でもないところがあります。長所が人目につくような職業では厚かましが謙虚さを凌ぐのだと、彼がよく嘆いているのを私は耳にしたことがあります。彼がそんなことを言うとき、私は彼が意地の悪い言い方をするのを聞いたことはありません。率直に自分はそれに向かなかったからその世界から足を洗ったのだと言うだけなのです。同じ目的つまり指揮官の引き立てに向かって努力する大勢の人を押しつけて進まなければならない彼には、徹底的な正直さとさらには整然とした行動それ自体が邪魔物なのです。しかしながら、彼は話の中で将官が功績によって配置したりまたその功績を調べようとしないことに対してそれを大目に見るのです。というのは、彼が言うには、私を助ける気のある偉大な人は私のことが分かるには色々なことを切り抜けてはならないからです。それは私がその人のことを理解する場合と同じことなのです。それ故、注目を浴びる人は、とりわけ軍隊では、偽りの謙虚さに打ち勝ち、自己の申し開きに対してきちんとした確信を持って、ふりをしているだけの人たちの執拗な懇願に対して保護者の助けにならなければならない、と彼は締めくくります。彼は期待すべきことを主張するのにしりごみするのは、任務についているときに攻撃にしりごみするのが軍人の恐怖であるのと同じように、市民の臆病なのだ、と彼は言います。この紳士はこのように虚心坦懐に自分および他人のことを語ります。こういった率直さが彼の話全般に流れています。軍隊生活は彼に多くの冒険をもたらしました。このことに関係して彼は一同にとってとても感じの良い人なのです。何故なら、彼は目下の者に命じることには慣れているのですが、決して威圧的にはならないからです。彼はまた、目上の人に従う習慣がついているのですが、卑屈になり過ぎることもありません。

私たちの仲間は武勇や時代の楽しみには不案内であり、ユーモアのある人たちの一団には見えないかも知れませんが、例外のひとりに勇敢なウィル・ハニコム⁴⁾がいます。この人は年齢からすると人生も晩年にかかっている紳士です。身体にとっても気を使ってきており十分な財産がありますので、額の皺そして頭脳の痕跡以外には歳月の刻印はほとんどありません。彼は上背もあり立派な容姿の持ち主です。彼は普通男性が女性を楽しませるそんな話がとても得意です。彼は常に身繕いはきちんとしており、人々に接するときの習性を忘れません。彼は語りかけられると微笑み、また付度なく笑うことができます。彼は流行の歴史に詳しく、我が国の細君や娘たちが髪の毛をカールしたりフードを被るようになったのはもともとフランス王の情婦たちをまねたのだ、そして、女性の腕さはかくかくしかじかのペティコートで保護されているのだ、そしてまた脚を見せたいという虚栄心のお陰でいち早くドレスが短くなったのだ、ということを知っています。一言で言いますと、彼の会話と知識はすべて女性の世界にかかわることなのです。彼の年輩の人たちは普通これこれの司祭がしかじかの場合になんと行ったかに関心を寄せるのですが、彼はモ

4) ウィル・ハニコム。王政復古期の「立派な紳士」という考え方を攻撃する際に、スペクテイターは真っ向からの攻撃ではなく嘲笑という方法を用いる。

ンマス公が宮廷で舞踏会をしたとき、ある女性が魅了され、またある女性は公爵の一行の先頭に立ってハイド・パークまで連れて行かれたのだと語ります。こういった重要な関係において、彼はいつも、例えば現君主の母君といった名高い麗人たちから優しく思いやりをかけられたり、扇でふたれたりして来たのです。下院で生きのよいことを言う若い議員のことについて口にするると、彼は「彼は血管にいい血が流れている。トム・ミラベルが彼の父親なのだ。あの腕白者は例の件では私を騙したんだ。私が言い寄った女性の中であの若者の母親ほど私をむげに扱った者はいない」とやりだすのです。このような彼の喋り方は総じて地味な私たちの仲間うちにあって、会話に活気を添えてくれます。私たちの仲間にはめったに口を開かないのは私以外にはいないのですが、みんなは彼は普通育ちのいい立派な紳士と呼ばれる類いの人物だと言います。彼の性格を結論的に言いますと、女性にかかわること以外では正直で立派な人物なのです。

次にお話する人につきましては、ごくたまにしか私たちの前に顔を出しませんので、私たちの仲間として考えられるかどうか私には分かりません。でも、この人が顔を出すと、他のすべての人に新たな楽しみを添えてくれます。この人は牧師さんで、とても達観した人であり、学問全般に通じ、人生の神聖な義務に忠実で、まさしくこの上なく立派な育ちをした人物なのです。彼は不幸にして虚弱な体質の持ち主であるため、職務の昇進によって義務づけられる責務を受け入れることができません。従って彼は聖職者の中ではちょうど弁護士の中での法律顧問といった位置にいます。彼のもつ精神の高潔さと人生の清廉さによって彼には信奉者ができます。何故なら、雄弁で声高であることが昇進につながるのですから。彼は自分からしゃべる話題を持ち出すことはめったにありません。でも、これまで長年にわたって、彼は私たちと同席するときには、私たちが彼に何か宗教の話題をふると、それを受け止めてくれます。彼はそういった話題を、現世になんの関心ももたない人として、あらゆる願望の対象へと急いでいる人として、そして死と病氣から希望を抱く人として、とても威信をもって論じます。以上の人々が通常私が仲間としている人たちです。

第3号 1711年3月3日（土曜日）

【アディソン】

思索にふけること、大いに楽しみとなること、

人の頭から離れないこと、これは夜再び夢となって登場する。（ルクレティウス）

最近、そぞろ歩きというか思索中に、私は銀行が入っている大きなホール¹⁾に立ち寄りました。そして管理職、秘書、行員、その他この豊かな銀行の人たち全員が公正で系統的な経済制度の中

1) グローサーズ・アリーの北詰め、ポルトリーの北、オールド・ジュエリーの東に位置するグローサーズ・ホールの大広間として知られるこの部屋はイングランド銀行創設時の1694年以来、イングランド銀行の役員室として貸し出されてきた。

で果たす役割に従って、いくつかの部署に配置されているのを見て大いに満足しました。この光景は私の記憶にあった、国民の信用の失墜²⁾、そしてその修復方法について読んだり聞いたりした多くの論調を蘇らせました。そういった修復方法は、私の意見では、常に関心と当事者の原則を切り離して組み立てられてきたために、欠陥があったのだと思います。

昼間に考えたことが一晩中私の頭から離れませんでした。そのため、私は無意識のうちに系統的といえるような夢を見ました。そしてそれは私の瞑想を、何と呼んでいいのか分かりませんが夢想つまり寓意といったものへと向かわせました。

思うに、私は昨日の午前中に訪れた大きなホールへと引き返したのです。でも驚いたことに、私が見したのは私が出掛けた銀行ではなく、ホールの上部の端の方に美しい処女が金の玉座に鎮座ましましての姿だったのです。彼女の名前は、銀行の人たちが言いますには、「国民の信用」ということでした。壁面には絵画や地図が飾り立てられていなく、金の文字で書かれた沢山の議会条例が飾られていました。ホールの上部の端には、右手に「統一法」、左手に「寛容令」³⁾を持った「マグナカルタ」がいました。ホールの下部の端には「王位継承法」⁴⁾がいました。これは玉座に鎮座まします処女からよく見える所に位置していました。ホールの両側は国債制度のために制定された議会条例で覆われていました。この淑女はこういったいくつかの調度に口には出せないほどの価値を置いているように見えました。それは彼女がこういった調度でしばしば目の保養をし、そしてそれを見ながらしばしば密かな喜びに包まれ微笑むほどでした。とは言え、彼女は同時に、それらを傷つけそうな何か近づいてくるのを見るととても異常な不安な表情を浮かべました。実際、彼女の振る舞いすべてがこの上なく弱々しく見えました。それが彼女の体質のひよわさに由来しているのか、それとも、後になって彼女に好意を寄せていない人から言われたのですが、彼女が憂鬱症に苦しんでいることに由来するのか、彼女はあらゆる物音に顔色を変え驚くのでした。後から分かったのですが、彼女はまた私が今までに出会った女性の誰よりも病弱な人であり、非常に血色がよくとても健康な状態から、あっという間に衰えやつれてしまう、そんな束の間の肺炎にかかりやすいのでした。彼女の回復は衰弱の場合と同じく突如としたものです。彼女は消耗性の異状から瞬時にしてこの上なく健康で元気な状態になるのでした。

私はほどなく彼女の体質のこういった素早い変化を観察する機会を持ちました。彼女の足元にはいつも世界の各地から届く手紙を処理している秘書が二人座っていました。その手紙は秘書のどちらかが一方に絶え間無く読んでいるのでした。彼女は非常に注意深く耳をそばだてていたのですが、耳にしたニュースで、顔色を変え、いろいろ健康ないし病気の徴候を見せたのです。

2) アディソンは前年の8月23日デイリー・クランツ紙に発表されたデフォーの『国民の信用に関する小論』などを念頭においている。

3) 1662年の統一法と1689年の寛容法を釣り合わせることで、アディソンは英国国教会以外の人についても関心を払うというホイッグの中道政策を強調している。

4) 王位継承法は1701年に制定され、プロテスタントの継承が保証された。王位につく者はハノーヴァー家のソフィア及びその子孫に限られた。

玉座の背後には莫大な量のお金の袋がありました。その袋は天井に届くほど高く積み上げられていました。彼女の左右の床はピラミッド状にそびえ立つ巨額のコインで覆われていました。でも、尋ねてみて、彼女の性質にかつてリュディアの王⁵⁾がとりこになっていたと詩人が告げるのと同じだけの徳目が備わっているのだ、そしてまた、彼女は気に入ったものは何でもその貴重な金属に変えることができるのだと聞いて、私はこのことにはそんなに驚きませんでした。

よく夢の中で遭遇するちょっとした眩惑、狼狽した思いがあったのち、ホールが驚きあわてて、ドアがさっと開け放たれ、これまで夢の中でも見たことのないような6人の忌まわしい幻が入って来たように思えました。その幻は二人ずつ入って来ました。もっとも、それは不釣り合いな組み合わせで踊っているように一緒にくたになっていましたけれど。この幻の衣服や容姿について述べるのは単調で退屈なことでしょう。そこで、私は読者には最初の二人が「暴君」と「無秩序」であり、次の組が「偏狭」と「無神論」、そして3組目が「国家の精神」と名前は分かりませんが22歳ぐらいの青年⁶⁾だったとだけお知らせしておきます。この青年は右手に剣をもっており、ダンスの最中に「首長令」に向かって始終その剣を振りかざしました。そして、私の傍らに立っている市民が私の耳元で左手に海綿をもっているのが見えるときさやきました。このように大勢の不快感を与える気性の人たちのダンスを見ていると、私はお互いを食することだけに目的を置いて共に踊る『リハーサル』⁷⁾の太陽、月、地球を思い出しました。

今までに述べましたことから、もしこの玉座にまします淑女がこういった幻のひとりしか見なかったとしたら、驚いて狂気に陥らんばかりになっただろうということは読者には容易に想像がつくでしょう。ではこの幻全員が一団となっているのを見たときの彼女の状態はどんなものだったのでしょうか。彼女はその光景を見て気が遠くなったのです。

彼女の精神はおじけづき、彼女の花のような頬は青白くなり、

彼女の美しさはほとんど跡形もなくなる。(オヴィディウス)

金袋の山に大きな変化が生じ、金袋は収縮し、沢山の空の袋ができました。元の十分の一ほどになっているのが分かりました。実際にお金が詰まっていた袋の場所を占めて、その形であった他の袋は空気で膨らまされていました。私はホメーロスの言う英雄がアイオロスからの贈物として受け取った風が一杯に詰まった袋のことを思い出しました。玉座の両側の金の山は今ではたんなる紙の山あるいはバースの薪のように束に結わえて刻み目をつけられた棒切れの束に見えました。

眼前で繰り広げられたこの突然の荒廃を私が嘆き悲しんでいる間に、この光景はすべて消え失せました。恐ろしい幻たちの部屋に、今度はダンスをする次の亡霊たちの一団が入って来ました。この亡霊たちはとても感じよく釣り合いが取れており、非常に気立てのよい亡霊たちで組織され

5) ミダース。手に触れる物をことごとく黄金に変えたといわれる伝説上のフリギアの王。

6) 22歳の若者。僧王ジェームズ・フランシス・エドワードは1688年6月10日生まれ。

7) バッキンガム公(1628-87)の作品で1665年創作、初演は1671年。

ていました。最初の一組は「自由」と「君主制」で、「自由」は「君主制」を右手に従えていました。第2の組は「中庸」と「信仰」で、「中庸」が「信仰」の手を取っていました。そして第3組が私の見かけたことのない人物と「グレートブリテンの精神」でした。最初の一組の登場を見て、この淑女は元気を取り戻しました。そして金袋は元のように膨らみ、薪の束と紙の山は金貨のピラミッドへと変わりました。そして私はどうかと言いますと、喜びのあまり我を忘れ、目が覚めてしまいました。もっとも、正直言いまして、私の夢想を打ち破ってもう一度ぐっすり眠りたかったのですが。

第4号 1711年3月5日(月曜日)

【スティール】

類い希な沈黙と慎み深さの一例。(ホラティウス)

著述家は最初に世の中に出るときには往々にして自分の作品のでき以外には考えることがないと思うものです。私は心中でしっかりそう自惚れながら、この3日間私の名声に耳を傾けるのを務めとしてきました。時々私を喜ばせる出来事に遭遇する一方で、私をひどく無念に思わせる出来事にも出くわしてきました。ある種の人たちがとても内容がないそのありさまを私はこのとき観察したのだと考えるのは信じられないことです。朝初めて戸外に出るとき、人々はいかに何も考えていないのでしょうか。彼らは新聞の何かの小さな記事によってけしかけられるまでは完全に頭は停止状態なのです。こういった人たちは若い著述家にはとても好都合です。何故なら、彼らは何事につけ心地よく思いたいということ以上には望まないからです。私がそこに慰めを見い出せば、私は人々の無能力さにそれだけ一層心を乱されるでしょう。こういった人たちは内省力を伴わないある種の好奇心をもった人たちなのです。そして彼らは私の新聞を読者というより傍観者として読むのです。あまりにも密接に私たち自身にかかわる質問にはほとんど喜びはありませんので、また世評を気にし過ぎるのは最悪のやり方ですから、概ね私はこれから先もこれまで通り普通にやって行くことにしました。そして名声ということに関しては、過剰な恐れや希望を抱かず、私の活動の構想には細心の注意を払い、その結果は無視することにしました。

私たちの行うことに対して私たち自身の心を満足させるということ以外の物差しによって行動することは果てしのない馬鹿げた営みです。寡黙な人はいかなる発言もせず自分自身のことを案じており、ほとんど誤解されないだろうと人は考えるでしょう。でも、私はかつて私が大変寡黙な人物であるという理由からイエズス教徒の疑いで拘引されたことがあります。私がそれ以後禍を避けるために仲間と付き合ってきたのはこの災難があつてからのことです。名をあげるためではなく、たんに好奇心を満たすために人の集まりに出てくる人はおそらく自室にいるときよりもっと繊細に身を引いていることの喜びを享受するものです。恋する人、野望のある人そして欲張りな人は抜け出せる仲間よりもっとひどい仲間につき従われるのです。他人が苦しめられている情

熱を免れるには心地よい孤独しかありません。私はまさしく古代の賢人と一緒になって「私はひとりでも孤独にはならない」と言うことができます。私は公共の場所では仲間には取るに足らない人物であり、大半の人たちのように顔売るためにその場に行かないのは明らかなのです。私は体裁を取り繕おうとする人たちの虚栄心を満足させるのです。そして、私はしばしば詩人が観客に向けるのと同じくらい、身なりのきちんとした紳士淑女から優しい視線を投げかけられるのです。この種の人目につかない存在には計り知れない満足感が伴いますので、私が日々受けるささやかな多少の不快感はその苦悩が消えます。そして実際、先日、ある人が私のことを「あの見れない人」と言い、別の人が「私はあの顔は12年前から知っていますよ。あなたも知っているに違いありません。でも、あの人が誰かと尋ねたのはあなたが初めてだと思います」と答えているのを、少しも不快に思わず小耳にはさみました。実を言って、私の人柄を近親者のようによく知っている人は大勢います。彼らはむやみに私の名前や特質を口にしたりしないで、極めてすらすらと例の某氏と言うのです。

こういった取るに足らない不利な立場の埋め合わせをするために、私にはあらゆるものを公平な目で見ているのだという大きな満足感があります。私は人々の情熱や関心には無頓着ですので彼らの才能、礼儀作法、短所、長所について非常に賢明に考察できます。

何かひとつの感覚が欠けている人たちが非常に力強くまたいきいきとその他の感覚を備えているということは驚くべきことです。例えば、私の口数の少なさというかしやべることを放棄していることは、私に口のきけない人のもつあらゆる利点を与えてくれるのです。思うに、私は見ることににおいては並の洞察力以上のものが備わっています。私はあらゆる階級の人たちに目を通して来たと自惚れています。それで、その人たちの会話の輪に入れられなくても、私が見る人たちの心の奥の考えや気持ちを鋭く推測するのです。運不運が私の判断力に影響を及ぼすなんの力にもならないのはこのためなのです。私はその人が引き立てられているあるいは不利な立場にいるといった境遇に対する先入観がなくても、宮廷で活躍しているか牢獄でしおれているのかが分かります。でも、彼らの状況に耐える内面の在り方から、私はしばしば榮えている人たちを気の毒に思い、不幸な人たちを密かに評価します。

口のきけない人と話をする人たちは、目の動き、顔色の変化から相手の感情を知ります。私は途方もなく沈黙を守っていますので、私と親しい人たちは一致して、私の笑いに応じ、私が首を振った問題については、私が口を開かなくても議論をするのです。ウィル・ハニコムは先日、右側にある紳士、左側に私を従えてある芝居を楽しんでいました。その紳士はウィルが独り言を言っているのだと思いました。私たちの前のボックス席の若い女性を私がとても賞賛して見ているのを見て、ウィルは「私は見方が全く違います。確かに彼女は見栄えはいいですが、彼女の表情に伺える純真さは無垢というよりむしろ幼稚なのです」と言いました。私がもう一度彼女に目を向けると、彼は「彼女のドレスがとてもよく似合っているのは認めますが、あの素敵なお陰はおそらく母親のお陰なのです」と言いました。「もっとも彼女の優雅なドレスを託すに足る美人で

はありますがね。でも、もし彼女がリボンの色を別のものから無断借用していたり、飾りのことで助言を受けているとすれば、私は彼女のドレスは褒めません。それは剽窃者を作家と呼ばないのと同じことなのです」と彼は彼の上品な言葉に対する機知を交えてそう続けました。私が彼女の隣の女性に目をやると、ウィルは私が見ているものについてロマンチックな想像力を働かせて次のように言いました。

「あなた、ご覧なさい、あの魅力的な女性を。汚れない考えで裏打ちされたあの美しい人を見てご覧なさい。純潔、気立ての良さ、そして感じの良さは彼女の顔に飛び交う魅力なのです。彼女は自分が美しいことを知っていますが、気立ての良いことも分かっています。自覚的な美德で飾り立てられた自覚的な美よ。あの眼差しにはなんという霊が宿っていることでしょう。あの人にはなんという輝きがあるのでしょうか。彼女の素晴らしさはそのまま容姿に出ているのです。彼女の様子には身振りの美しさがあり、彼女の視線には言葉の力に匹敵するものがあるのです。」

その人から目をそらすほうが分別のあることでした。そこで私は女性の一团を構成している思慮を欠いている人たちへと目を転じ、並の画家たちによるたんなる絵に過ぎない取るに足らない人々の肖像画へと抜け目なく目をやりました。

私自身の頭の働きはこのような私の人生の大きな楽しみなのです。私は特定の友人以外の人との話の輪には決して首を差し入れませんし、公共の場で共にすることもあります。そういった習性はおそらく私の中に並外れた内省を呼び起こしたのでしょうか。でも私は著述による以外にはこの結果を伝えることはできません。私の喜びは概ねその見地に限られていますので、いつも気楽にかつ心安く女性の世界に入ることを特別の幸せと考えています。私が褒め称えたりお世辞を言わなかったとしても、私はまた彼女たちを中傷したり彼女たちに反する行いもしなかったのです。女性が世の中の半数を占め、我が国民の公正な丁重さおよび慇懃さによって¹⁾、より力を持った存在ですので、この私の思索のかなりな部分を彼女たちのために捧げ、未婚、結婚、寡婦の相應しい務めを示すことによって若い人たちを先導する積もりです。私の仕事が女性に関係する日の場合は彼女たちの理解に相應しい文体と体裁をとるように努めます。私がこんなことを言う場合は、扱う主題をおとしめるのではなく高める²⁾のだということを言っているのだと分かって戴かなくはなりません。彼女たちを楽しませる話は品位を低下させるのではなく洗練されなくてはなりません。普通の身のこなしで、跳ね回らないけどダンスができるのだと分かるように、人はしゃべらなくても学識があるように見えるのです。一言で言って、もしこの新聞が理性をわきまえた女性たちの間のお茶席の話題となるのであれば、それは私の仕事の最大の誉れなのです。そのために私は女性に関する問題を扱います。女性が男性に近づいたりまた男性から逃げ出したりにすることに気を配っている様子を、また、家柄、関心、愛情によって男性に縛られている様子を扱います。この場合、思索において私がどのような技術を用いるにしましても、恋人たちの目

1) 外国人観察者はしばしばイギリス人の特質だと論評している。

2) 「気高くする」の意。exalt のこの意味での使い方は OED の最古の例。

が私の前でお互いに語っていることを裏切って漏らすようなことはないのだということを明らかにしておいた方が道理に合っていると私は考えます。同時に私はこの約束によって私が認める公の集まりでの目配せによってなされる偽りの断言を隠す義務があるとも思いません。私は両性に考えていることと行うことを一致させるよう努めるのです。このことによって私が思索中には恋愛はあまり重要でない他の事柄と同じく裏表なく進められることになります。このことは最大の関心事ですので、人々は今後は恋愛での不品行に対して最大の非難を免れないでしょう。恋愛における欺瞞はこれから先は友情における背信や事業における悪行よりも非難さるべき側面を持つこととなります。この重要かつ立派な目的のために、社会の接着剤であるこの気高い情熱に対するすべての侵害行為は厳しく問われることとなります。しかし、本日及びこれまでの紙面でそれとなく匂わせているこの件およびその他の問題につきましてはこれから先の論説の中できちんと取り扱います。本日はたんに世間の人たちに私が怠惰ではなく多忙な観察者なのだということを論ずにとどめておきます。

第5号 1711年3月6日（火曜日）

【アディソン】

その光景を見たら、あなたは笑わないだろうか。（ホラティウス）

オペラというものは、五感を満足させ観客の游惰な注意力を保つことができるのは唯一装置だけなので、飾り付けをこの上なく贅沢にすることが許されているのかも知れません。しかしながら、常識的には幼稚で馬鹿げて見える場面やからくりはいい加減にしておくべきです。チャールズ王当時の識者たちなら、ニコリーニ¹⁾がアーミン毛皮の外套を羽織って嵐にさらされ、ボール紙の海に浮かんだ無甲板船の中で衰えていくのを見て、どれほど笑ったことでしょう。もし彼らが野火を吐く絵の龍、フランダースの雌馬に引かれた魔法をかけられた戦車、そして人為的な背景に流れる本物の滝で楽しんだとすると、彼らはどの範囲までからかいであることが知らされていたのでしょうか。わずかながらの批評の技術は私たちに同一作品内では実体のないものとあるものを混在させるべきではないのだと教えています。また、自然の描写として考えられている場面は草木そのものではなくそれに似た物で間に合わすべきだと教えているのです。もし牛や羊が群れている広い平野を描写する場合に、その場面にその地方の絵を書き舞台の何カ所かに羊や牛を詰め込むのは馬鹿げたことでしょう。これでは部分的には本物で、部分的には想像上の飾り付けとなり矛盾します。私は本紙面で述べていることを我が国のオペラファンだけでなく演出家のみなさんに忠告したいと思います。

二週間ほど前、通りを歩いているときに、私はある人が小鳥を一杯入れた籠を肩に載せて運ん

1) ニコリーニ。ニコラ・グリマルディ（1673-1732）はナポリの男性コントラルト歌手。1708年にイギリスにやって来た。

でいるのを見かけました。どうするのかと不思議に思っていると、その人はとても運よく知人に出会いました。その知人も私と同じように好奇心を示しました。知人が肩に何を載せているのかと尋ねますと、彼はオペラで使うスズメを買ってきたのだと答えました。「オペラで使うスズメだって、あぶり焼きにするのかい」と彼の友人は唇をなめながら言います。すると、「違います。3幕が終わりかけたところ登場して舞台中を飛び回ることになっているのです」と相手が答えます。

この奇妙な対話がとても私の好奇心を煽りましたので、私はすぐさまそのオペラの切符を買いました。そしてそのオペラを観て私はスズメが快適な木立ちの中の鳴鳥の役を演じるのだということが分かりました。もっと注意深く見てみると、サー・マーティン・マーオール²⁾が愛人をペテンにかけるのと同じように、スズメが観客に対してトリックをかけているのが分かりました。というのは、スズメは観客に見えるところで飛ぶのですが、さえずりは舞台背後のフラジョレット(縦笛)と鳥笛から生じたのです。同時に私は次のような発見をしました。役者たちが話していることから、オペラの改良のために舞台装置に対して大きな腹案があることが分かりました。壁の一部を取り壊し、馬を百頭登場させて観客を驚かせる計画があったのです。そしてまた、棧橋や水道設備が利用できるように、劇場へ実際に川を持ち込む計画があったのです。この計画は、その後私が聞いたところによりますと、夏のシーズンまで延期されています。その方が泉や滝から生じる涼感が上流社会の人々に受け入れられ易くまたさわやかだと考えられているのです。一方、冬のシーズンのためにもっと愉快な見世物を考え出すために、『リナルド』³⁾のオペラは雷と稲妻、イルミネーションと花火で溢れています。観客はこういった見世物を風邪を引かず、実際に、火傷の危険もさほどなく、観ることができます。何故なら、そういった事故が起こった場合に備えて、小さな警報ですぐ作動するように水を満載した消防車が数台用意してあるからなのです。しかしながら、私はこの劇場主とはとても親しいものですから、このオペラをここで上演する前に彼には十分保険に入っておいて欲しいものと思います。

国の違う二人の詩人が考案し、男女二人の魔術師によって引き起こされるこの場面が驚嘆すべきものであることになんの不思議もありません。アーミダは、梗概で教えられますのですが、アマゾンの魔術師で、哀れなシニョール・カサーニは、登場人物から知なのですが、キリスト教徒の魔術師なのです。正直に言いまして、アマゾン族の人が黒魔術に精通している様子、また善良なキリスト教徒が、それがこの魔術師の役なのですが、悪魔に対処する様子を知って私は非常に当惑しました。魔術師にならってこの詩人のことを考えるために、私は端書きの最初の詩句を少し紹介してこのイタリア人の嗜好をお教えしましょう。「寛大な読者のみなさん、夕暮れの誕生をご

2) 『サー・マーティン・マーオール、またの名を偽りの純真さ』。モリエールの『粗忽物』をニューカッスル公が翻訳したものをドライデンが翻案。1667年8月15日にリンカーンズ・イン・フィールド劇場で初演。

3) 『リナルド』。1710年の11月か12月にイギリスへやって来たヘンデル(1685-1759)の作品。2月24日、ヘイマーケット劇場でオープン。第4回目の公演の広告が3月6日に出された。

覽下さい。夕暮れは夜の子供ですが、闇の流産した形ではなく、パルナッソスの光をいくらかたたえた太陽神アポロの息子となるのです。」彼はその後ヘンデル氏を現代のオルペウスと呼びます。そして、同じように崇高な文体で、二週間でこのオペラを書き上げたのだと私たちに知らせます。才人とは私たちが非常に熱心にその嗜好に従おうとするそんな人たちのことです。実は、現代イタリアの最も優れた作家たちは我が国の銜学者以外は誰も使わないような華麗な言葉かつ退屈な回りくどい言い方で自己を表現するのです。そして同時に、彼らは彼らの作品に我が国の大学2年生までの若者たちなら恥ずかしく思うようなお粗末な想像力と奇想を詰め込むのです。なかには両国の作品の違いを生み出すのは往々にして才能の違いだと考える人たちがいるかも知れませんが、そうではないのだということを示すためには、キケロやウェルギリウスといった古代のイタリア人の作品を調べれば分かるのですが、我が国の作家の方が現代イタリアの作家よりも思考方法および自己表現の仕方においてはるかに古代イタリアの作家に似ているのが分かります。この詩人自身につきましては、このオペラの夢は彼に由来しているのですが、私はウェルギリウスの詩の一行は安っぽいタッソー全作品に値するのだというボワロー氏の意見に全面的に賛成です。

ところで、スズメに話を戻しますと、このオペラでは非常に沢山のスズメが放されましたので劇場からスズメを片付けられないのではと懸念されます。そして、他の芝居で時ならぬ場面でスズメが飛び出し、淑女の寝室を飛び回ったり、王様の玉座にとまったりするのが見えるのではないかと危惧されます。おまけに観客の頭に時折糞が落ちてくるということも懸念されます。私は確かな筋から、かつて、あるオペラにホイッテントンと猫の物語を挿入する計画があり、そのために大量のネズミが集められたことがあったと聞いています。しかし、劇場の経営者リッチ氏が非常に賢明にも猫にそのネズミ全部は殺せない、そしてまたその結果、猫がやって来るまでの島のように舞台にはネズミが横行すると考えました。そういうわけで、彼は自分の劇場でそのオペラを上演するのを認めませんでした。実際、私は彼を非難することはできません。その時彼はとてもうまく言ったのですが、私は我が国のオペラの役者たちの中に、ドイツの大きな町のネズミ全部を笛の音で導き有害な生き物を町から一掃したかの名高いハーメルンの笛吹き男に匹敵しようとする人がいるとは耳にしていません。

本日の新聞を終えるにあたって、私は読者に私の聞くところではリナルドとアーミダのオペラにオレンジの木立ちを準備する約束がこの劇場の庭師に任命されるロンドンとワイズとの間に交わされているとお知らせしておかななくてはなりません。今度このオペラが上演される場合には鳴鳥はシジュウカラがあてがわれということです。このオペラの引受人は観客を満足させるためには金も労も惜しまない決意なのです。

【付記】

『スペクテイター』は言うまでもなく、スティール (Richard Steele (1672-1729)) とアディソン (Joseph Addison (1672-1719)) によって発行された日刊紙である。この新聞はスティールがそれまで週3回発行していた『タトラー』(1709-11) に代わるものとして、新たにアディソンと組み、1711年3月1日に創刊され、1712年12月6日の555号まで続いた。その時点でいったん中断されたのち、1714年6月18日から再び発行されて、最終的には1714年12月20日の635号で廃刊となった。

翻訳にあたってはまず最初に、*The Spectator* (London, printed for J. Parsons, 1793) 8 vols. を底本にし、この第1巻に載せられている『ジョンソン博士によるアディソン伝』と『献辞』から始めた。なお、『スペクテイター』本文の各号に付した執筆者および注釈については Donald F. Bond 編注 *The Spectator* (Oxford University Press, 1965) を下敷きにした。

『スペクテイター』に関してはわが国でも夏目漱石が「アディソン及びスチールと常識文学」の中で、詳しくかつ辛辣に論じているところであり、一般にその性格描写の妙はやがて勃興する小説、新聞および随筆への先鞭となった、いわば、散文のお手本となった日刊紙であったことはよく知られていることである。18世紀初頭のロンドンにおける中産階級の思考形態、生活様式をはじめ、時代思潮を知るうえでも非常に興味深い資料である。

今回は紙幅の関係もあり5号までとしたが、以後都合のつき次第順次発表する予定である。